

---

# オレとゆー君と召喚獣

那家乃ふゆい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オレとゆー君と召喚獣

### 【Zコード】

Z6549Y

### 【作者名】

那家乃ふゆい

### 【あらすじ】

新学期が開始して二日目。文月学園に一人の転校生がやってきた。『オレ』という一人称ながらも大人しい雰囲気を持つた彼は、あることか学年最底辺のFクラスへと転入することに。しかし、彼はそこで懐かしい旧友との再会を果たすのだった。「お前……雪冬か?」「もしかして……ゆー君?」打倒Aクラスを胸に掲げ、彼らは今日も学園中を駆け抜けていく。

## 第一問（前書き）

こんにちは。知っている人は久しぶりです。  
ふゆいと申します。

今回は新たにバカテスの一次創作です。  
まだまだ至らないところもありますが、誠心誠意頑張りつと思いま  
すので、応援よろしくお願いします。

それでは、お楽しみください。

## 第一問

「す、」「いなあ……桜つてこんなに綺麗だつたっけ」

長々と続く桜並木を、通学鞄を肩にかけて歩きながら、少年は一人呟く。

（中学校のときも桜は見たけど……ここ今まで見事な咲き方はしてなかつたなあ。やっぱり地方によつて見栄えが違うのかな？ 桜って不思議）

飽きたる」となく桜を見続けつつも、黙々と正面玄関へと向かう。

（お母さんには聞いた限りだと、あそこで手続きができるはずなんだけど……この学校広すぎるよ……。どうが正面玄関か分からんないんだけど）

もうかれこれ三十分はこの近くをうろついて歩いてる。『ひや、ひや』の少年、生粧の方向音痴のようだ。

「……どうしたの？」  
「え？」

少年が周囲をキョロキョロ見回していると、そんな彼を不思議に思ったのか、一人の少女が彼に話しかけてきた。

日本人形のような美しい黒い髪を、腰のあたりまで伸ばしていて、まさに【大和撫子】って感じの綺麗さ。手足も身体もすらりとして細くて、それでいて凹凸はしっかりしててる。一言で形容するなら【美

人】以外の何物でもない。

(うわあ……綺麗な人だなあ……)

そんな素直な感想を浮かべながらも、彼は話しかけてきた少女の方に向き直る。

「あ、すみません。ちょっと正面玄関を探しているんですけど、迷つちゃって……」「……迷った？ もしかして、転校生？」

「あー、うん。そうなんですよ。昔はこっち辺に住んでいて、五年ぶりに帰ってきたんです。それで、割と近所のこの学校に転入することになつて……」

「……そう。五年ぶり…………あれ？」

はた、と急に少女が動かしていた足を止めた。少女の不意の行動に、少年はコクンと首を傾げる  
疑問符を浮かべる彼を他所に、少女はまじまじと少年の全身を直踏みするかのように見つめ始める。

(うー、なんなのさ……めちゃくちゃ恥ずかしいんだけど……)

人に注目されるのが苦手な彼にとって、同年代の少女、しかも美女に見つめられるのは、なかなかに過酷な試練だった。

「あ、あのあ……どうしたんですか……？」  
「……人違いだったら、「ごめん。でも、質問していい？」  
「え？ あ、はい。構いませんけど……」

思わずと言つた様子で少年は少女に尋ねる。

少女はあちこちに視線を泳がせながら、ボソボソと小さめの声で呟いた。

「……貴方……もしかして、雪冬？」  
「…………え？」

思わず、固まる。

（なんでこの人がオレの名前を……？　って、アレ？　この人、よく見るとどうかで会つたことがあるよ？）

「も、もしかして、霧ちゃん！？」

「……うん。五年ぶり」

「あははっ、ホントに久しぶりだねっ」

（ま、まさか霧ちゃんだったなんて……小学校以来だから全然分からなかつたよ……。こんなところで旧友と再会できるなんて、世の中は何が起こるか分からないね……）

思いがけずも再開した、懐かしの友人。五年もたつているのにも関わらず、よくもまあ自分だと認識できたものだ。本当に世の中といつもの面白い。

「……最初は全然分からなかつた。背も伸びてるし、髪も長くなつてる」

「それは霧ちゃんもだよ。昔から綺麗だつたけど、今はばずっと美人さんじゃない！」

「……ありがとう。そういうの、昔から変わらない」

「あ、あれ？　そつかな？」

(確かに昔から人を褒めるのは好きだったけど……そこまで変化がないかな?)

苦笑いを浮かべ、頬を恥ずかしそうに搔く少年 雪冬。昔の自分を引き合いに出されたことで、羞恥といつぞの感情が彼の全身を支配していた。

「……全然、変わつてない」

「や、そう言わると少し情けない気もあるけど……。……あ、そういういえば【ゆー君】は? 一緒に学校に通つてるんじゃないの?」

懐かしい親友の名前が頭に浮かんだので、雪冬はそのまま口にする。昔は一人とも(彼的には)仲が良かつたから、今も親しくしているのだろうか。

期待を胸に尋ねる。しかし、霧ちゃん 霧島翔子は少し寂しげな表情になると、苦笑いをした。

「……雄一もここには通つている。でも、今は少し疎遠気味。あんまり話す機会がない」

「あ……そつなんだ……」

「……うん。でも、雪冬が気にすることじやない。もうすくべで、解決するはず」

「や、そうだね。いつまでも引きずつしても仕方がないしねー。」

無理やりに元気を引きずり出し、大声を上げる。こんな暗い気持ちの時には元気が一番だと相場が決まっているのだ。

雪冬の不器用な元気には、翔子は我慢できずに口元を抑え控えめに笑つた。

「……ふふつ」

「？　どうしたのや、霧ちゃん」

「……やつこいつらも、相変わらず」

「う……あ、霧ちゃん。恥ずかしいからやめよハナハナのせ…」

…

結局雪冬は、目的地である正面玄関に着くまでの間、翔子に弄られ続けたのだった。

「……それじゃ、私はこっちだから」

「うん。またね」

三階に上がり、別れ道である渡り廊下へと着いた雪冬達。どうやら翔子はAクラスと呼ばれる教室に属しているらしい、そのまま新校舎の方へと歩いて行ってしまった。

廊下の向こうへと消えていく翔子を見送つてから、ふう、と溜息をつく。

「……さあ、オレは旧校舎だね」

手渡された資料を読みながら、教室へと進んでいく。

彼が所属するところはFクラス。転校生でまだ学力審査が終わっていないことから、そこに入ることが決まったようだ。

「えーと、男子が四十人超で女子が一人……なんか危険じゃない?  
Fクラスって」

(そんな飢えた状態の男子の中に女子を入れるなんて……まるで「食べてください」と言わんばかりじゃないか。オレならすぐには逃げ出すと思う。)

そして、この観察処分者っていうのはなんなんだろ? 資料には学園一の問題児って書いてあるけど……なんでわざわざ特殊な呼称を付けるのかな? 流行り?)

世間一般とは明らかにかけ離れた状況。今まで聞いたこともない単語に、雪冬はわくわくした気持ちを隠せなかつた。今もぎゅっと握りしめた拳がプルプルと震えている。

「……つと、そんなこと言つてる間に着いちゃつたね。……ていうか、これは学校としてセーフなの?」

目の前に現れた教室を見て、彼は思わず溜息をつく。

(ドアがボロボロの木製つていうところからヤバそうなのに、室札は割れてるし、窓ガラスにはテープがいっぱい貼られてるし……学び舎として成り立つてはいるのかな?)

「まあ、気にして仕方ないんだけどね」

文句をたらたら並べたところで、環境が改善されるわけでもない。ここは腹をくくつて受け入れるべきだろう。幸運なことに、雪冬は

順応性抜群の少年だ。たとえ教室がどんな状況だつて、過ごしていく自信と実力を兼ね備えている。……実力、というのは少し理解できないが。

「……よしつ」

すーはーと大きく深呼吸。転校生は最初のツカミが肝心だ。失敗してしまったならこれから学校生活に大きな支障が出るかもしれない。

(こにはノリと勢いで乗り切ろう。……)

パンツと自分の両頬を平手打ちし、気合を入れる。これも転校生の醍醐味というものだ。自分の協調力が試されるとき。雪冬の心の奥底で今世紀最大の闘志の炎があがつた。

「イチ、二ーの……サンツ？」

ガラツ

「おはようございまーす？」

『『『…………はい?』』』

突然ドアが開いたことに驚いているのか、教室中の視線が彼を串刺しにする。

(う、うう……緊張するなあ……)

どうやら今はホームルーム中だつたようだ。初老の男性教師が、教壇に立つて司会を務めている。

教師は雪冬に気が付くと、やんわりとした態度で彼を招き入れる。

「ああ、君は先ほど職員室で報告のあった生徒ですね？ とりあえ  
ず、ここにきてもらいますか？ 紹介から始めたいと思います」

「あ、はい！」

畠が敷き詰められた床をとてとてと教卓まで歩く。なぜか一步踏  
み出すことに畠が抜けそうな感覚になるが、きっと氣のせいだろ？  
あまりにも辛辣な教室状況に冷や汗を浮かべながらも、ようやく  
教壇に到着し、改めてクラスメイトの方を向く。

そんな雪冬を微笑ましそうに見ながら、先生は彼の軽い紹介を始  
めた。

「えー、新学期が始まって三日が経ちましたが、今日から皆さんに  
新しい仲間が増えます。皆さんも突然すぎて驚いていると思います  
が、仲良くしてくださいね？」

すつ、と周りから気づかれないくらいの強さで先生が彼の背中を  
押す。

(わ、もう出番なの！？ ま、まだ緊張が取れてないのに……)

ドキドキする胸を必死に抑えつつも、再び前方を見る。

多少個人差はあるけど、同様に笑顔で彼の方を見るクラスメイト達。  
突然現れた雪冬を、受け入れよつとしてくれているようにも感じる。

(あ……この人たち、根本的な部分で優しいんだ……)

気が付くと、あれだけ激しく鳴っていた心臓が、静かになつてい  
た。いつのまにか肩の荷も下りているようだ。

よし。

「え、えーと、時雨雪冬<sup>しぐれゆきとう</sup>って言います。お父さんの都合で五年ほどこの町を離れていましたが、今年になって帰つてきました。こんなタイミングでの転入で、右も左も分からない未熟者ですが、どうかよろしくお願ひします」

ペコリ、勢いよく頭を下げる。そして、一・二秒ほどの静寂が教室を包み込んだ。

(あ、あれ……失敗しちゃったかな……?)

心配になり、そのまま顔を上げられず俯く。

(「う……やつぱりダメだつたの……?」)

一人絶望感に打ちひしがれる雪冬。やはり草食系には成功できなかつたのだろうか……。しかし、そんな彼の不安を打ち消すように、誰かの叫び声が突然雪冬の耳へと届いてきた。

「雪冬……お前、本当に雪冬かー?」

「え……?」

予想外の言葉に彼は思わず顔を上げ、声の主を見つめる。

教室窓際後方から一番目の席。百八十センチほどの背丈に加えて、がっしりとした身体が健康さを物語っている。そして何よりも特徴的なのは赤っぽい色のたてがみヘアードラフ。狼のような人だ。

残念ながら、雪冬の記憶にこんなガタイのいい知り合いはない。しかし、その人を見た瞬間、彼の脳裏にはとある一人の人物が浮

かび上がっていた。

(え……嘘でしょ……それが……)

「やー君、なの……？」

雪冬の言葉は、その少年はおひくつと頷いたのだった。

## 第一問（前書き）

こんにちは。ふゆいです。  
やつと一話田を更新。出来る限り連続投稿で頑張ります。  
それではお楽しみください。

## 第一問

「いやあ、まさか偶然にもゆー君と同じクラスになるとはね。神様も悪戯が過ぎるよ」

「それはこっちの台詞だ。五年もかけて再開するなんて、どこのノベルだつての」

あはは、笑い合つ一人。

若干糺余曲折はあったものの、無事に自己紹介を終えた雪冬は、先ほど感動の再会を果たした少年、坂本雄一と雑談に花を咲かせていた。

「ゆー君、なんか格好良くなつたよねえ。身体も大きいし。オレはまだ全然身体の発育も進んでないのに……するいや」

「いやいや、お前がここまでかくなつたら逆にドン引きだつて。草食系男子は小せえぐらじが丁度いいんだよ。だから、お前はそのままでいい」

「うー……オレのコンプレックスを褒めないでよお……」

むー、と頬を膨らませる雪冬。雄一がしたら吐き気しか催さないが、彼がすることで一種の癒し効果が教室中に満ち溢れていた。現に、クラスの八割はお茶をすすずと啜りながらほんわかした表情でそちらを見つめている。というか、いつの間に用意されたのだろうか。

「え、えっと……雄一、そろそろその子の説明をお願いしたいんだけど……」

「ん？ ああ、お前らは初対面だつたな」

田の前で展開されている幼馴染ムードに引き攣った笑みを浮かべつつも、どこか抜けた感じの少年 吉井明久が雄一に話しかける。

明久の周りにいた者たちも同様にコクコクと頷いていた。恐るべき団結力。正体不明の少年を前にして、今Fクラスの心は一つになつた。

「コイツは時雨雪冬。俺の小学校時代の幼馴染で、一番仲が良かつたと言つてもいいくらいの親友だ。友達の少なかつた俺になにかと懷いてきてな……」

「ち、違うよ！？ 懐いていたんじゃないって！ オレは単にゆー君と氣が合つてただけだよ！ そんな弟分みたいな関係じゃ……」

「……なるほど、そういう子なんだね」

「まあそんな感じだ」

「なんかあらぬ方向で納得されてる！？」

ガーン、という効果音が付きそうな表情で落ち込む雪冬。そんな彼に苦笑いしながらも、雄一は明久達の紹介を進めていく。

「こいつは吉井明久。俺の悪友で、文月学園一のバカだ。観察処分者とも言われている」

「ちょ、雄一！ よりによつてバカ扱いは酷くない！？ そりゃあちょっと人より勉強は苦手だけど……学園一つてほどじやないと思うよ！？ ねえ皆！」

「…………（ふいっ）」「」

「畜生周知の事実か！」

「…………うん、なんとなくどんな人か分かった気がするよ。よろしくね、アキくん」

「……なんかその呼ばれ方は特定の危険人物を思い出すんだけど…  
…ま、いいや。こちらこそよろしく」

お互い笑顔で握手をする一人。なんだか似たものオーラで包まれている気がするのは気のせいではないだろ？。今ここに、明久二号が誕生した瞬間だった。

「……バカが増えたな」  
「ん？ なにか言った？」  
「いやなにも」

雄一の失言もどこ吹く風。鈍感、難聴、草食と、ある意味三拍子そろつた一人が完成した。

明久に続くように、残りの生徒達も自己紹介を行っていく。

「…………土屋康太。趣味はとつちょ…………なんでもない。特技はとうさ…………特にない」  
「うん。趣味は盜聴で特技は盗撮だね。ちょっと変な趣味だけど、どんな写真を取り扱ってるの？」  
「…………これ」

疑うこと知らない雪冬に、康太は素直に自前の写真を取り出す。そこに写っていたのは一人の女生徒。なぜか近くに立っている男子生徒と瓜二つな、少し強気そうな美少女だ。

それはどうやら体育の時間のようで、少女は文月学園指定の体操服に身を包み、ペアの生徒と柔軟体操をしているところだ。身体を捻ることで通常ではあり得ない露出と濡れが見えている。肢体に浮かぶ汗がなんとも健康的で美しい。

「…………自信作」

血漫げに胸を張る康太。どう見積もっても確実に犯罪レベルなのだが、誰も気にしてない様子。大丈夫か文月学園。プライバシー保護の重要性をひしひしと感じた。

「…………す、すゞ……！」

しかし、この少年もまた普通ではなかつたようだ。盗撮写真を見て歓喜の表情を浮かべている。ここにまた一人、彼を尊敬する信者が出現した。ムツツリ商会今日も商売繁盛。

結局そのままお買い上げ。どうやらその少女は雪冬のストライクゾーンだと真ん中だったようで、彼は大事そうに写真を財布の中に入れた。第二話にして早くもキャラがぶれ始めている主人公。この作品の崩壊も近いかもしない。

「ワシは木下秀吉。今お主が買った写真の少女の双子の弟じゃ。よろしく頼むの」

「へえっ。だから女の子みたいに可愛いんだね。オレ最初は女だと思つてたよ」

「そりじゃ、ワシは男じゃぞ？ 決して女ではない。ましてや性別

【秀吉】でもない。男なのじゃ……」

「ど、どうしたの！？ なんか黒いオーラがつ」

「放つておいてやれ、雪冬。秀吉にもいろいろあるんだよ」「う、うん……」

男じや、男なのじや……とトラウマ全開で座り込んでしまった秀吉に、苦笑いを隠せない雪冬。願わくば常識人が現れてくれることを祈りつつ、次の生徒へ。

「ウチは島田美波。ドイツからの帰国子女なの。趣味は……アキを

ボッ「ボコにする」とよ

「待つんだ美波。一日前より趣味に磨きがかかつてない！？」

「なるほど。アキくんと島田さんはそういう関係なんだね」

「違う！なんか双方の合意の上で成り立つているような流れだけど僕はこれっぽっちも肯定してないんだ！」

「大丈夫だよアキくん。……世の中には色んな趣味の人がいるんだから」

「誤解だあ

つ？」

哀れ吉井明久。必死に弁明をしようと試みるが純粋すぎる雪冬は既に美波の話を信じてしまっている。今頃雪冬の脳内では明久の欄に【マゾヒスト】と書かれてしまっていることだらけ。

「最後は私ですね。姫路瑞希です。ようじへお願ひしますね

「あ、うん。ようじへく」

桃色ロングの巨乳少女が礼儀正しくペコリと頭を下げる。釣られて、雪冬も慌ててお辞儀を返した。ようやく常識人が現れようだ。落ち着いた雰囲気の少女は綺麗な笑顔で雪冬の方を見ている。

「えーと、私は皆さんみたいな特技はないんですけど……趣味は料理です」

「へえっ、料理かあ……オレ、料理ができないから、そういうの憧れるんだよね。よかつたら、今度教えてくれない？」

「はい、いいですよ？」

「「「ちょっと待つた？」」「

「へ？ どうしたの？ みんな」

平穏無事な会話を繰り広げていた二人を邪魔するかのように大声を出す雄一達。というか男子勢。なぜかその顔は青ざめているよう

にも見えるが、どうしたのだろうか？

首を傾げる雪冬に、雄一達は最大音量の小声といつ器用な方法で怒鳴つてくれる。

(悪い)とは言わん！ 姫路から料理を鬻(め)うのだけはやめとけ！  
(え？ なんですか。いい人じやないか。きっと料理も上手いんですね？)

(確かに一般常識で考えれば上手いとは思ひません……姫路さんは独特すぎるから危険なんだよ！)

(料理に化学薬品を用いるくらいにじやからの)

(え、えー……それって、料理つて言えるの？)

(……化学薬品)

(な？ だから、アイツに鬻うのだけは、本当にやめておけ。これ以上必殺料理人が増えるのだけはなんとしてでも避けたい)

(う、うん……)

「あ、あのー……どうかしたんですか？」

突然内緒話を始めた男性陣に、瑞希は疑問符を浮かべる。自分の料理を他人に教える機会ができるのを妨害されたせいか、少し不機嫌そうだ。

「い、いや、すまんが姫路。雪冬に料理を教えるのはまた今度つてことでいいか？」

「え？ どうしてですか？」

「姫路さんに習う前に少しでも腕を上げておくんだつて！ ほ、ほら、姫路さんは料理が上手でしょ？ だから、足手まといにならないようにするんじやないかな！？」

「…………雪冬は他人思い」

「じゃから、の？ 少し我慢してくれ」

「む……仕方ありませんね……」

「「」「」めんなさー……」

男子勢の決死の説得により、殺人犯増加をなんとか食い止めることに成功。今日もFクラスの平和は守られた。非常にやりきった表情をしているのが印象的だ。

まあなにはともあれ、これで自己紹介も無事終了。他のクラスメイト達も一応名前とかを言ってから、事態は落ち着きを取り戻した。

「…………さて、それじゃ準備をするかな」「準備？ 今からなにかあるの？」

雄一の言葉をきっかけに、クラスメイト達がぱたぱたと動き回つていいく。卓袱台を廊下側に寄せ、今にもバリケードとして機能しそうな並べ方だ。

突然なにが始まったのか、雪冬は雄一に尋ねる。

雄一は「ああ」となんでもないよろこびで頷いた。

「お前はまだ転校してきたばかりで知らなかつたな。俺達は今、とあるクラスと戦つているんだよ」

「戦う？ それって、パンフレットに書いてあった【試験召喚戦争】つてやつ？ 確か、この学校で試験的に使われている、【召喚獣】を使役して戦うって言つ……」

「そう、その【試験戦争】や。各クラスの名誉と威信をかけて、全生徒が全力を以てして凌ぎを削る。まさに学生版の戦争」「でも、まだ新学期が始まって二日目だよね？ なんでこんな早く戦争を……」

「別に、大した意義はない。ただ、Aクラスの設備が欲しいだけ。今は、それに辿り着くための道程つてところだ」

そこで一皿言葉を切る。そして、雄一は野生児じみた笑みを浮か

べると、楽しそうな表情で言こ放つたのだった。

「今年で一番田の強さを誇る、【Bクラス】との試合戦争だ」

## 第一問（後書き）

雪冬（以下・雪）「ゆうきーちやんねるバー？」

雄一（以下・雄）「…………」

雪「すめらひぱぎー… 時空雪冬です！」

雄「…………こや、なんだいの「ーナー」

雪「わい、ホコガ悪いなあゆー君は。」これがアシスタンツのユ

ー君」と坂本雄一です!」

雄「…………まあ、よろしく」

雪「さて突如始まりましたこの「ーナー！」の「ーナー」は本作品【オレとゆー君と召喚獣】をより深く楽しんでもらおうと立て上げられた、いわゆる補足コーナーなのです!」

雄「すいぶんどぶつちやけたな。ていうか、こんな序盤から補足なんていいるのか?」

雪「いやまだいらないよ? でも、次回からは召喚獣関係とかでいふじやない? だから、一応顔見せ程度に」

雄「なんといつ適当……作品が普通だから後書きで取り返そ……」

雪「ゆつきーパンチ?」

雄「あべしつー!」

雪「ふうつ。そんなこと書いつゆー君はおぬむの時間だよ」

雄「…………(ぐつたり)」

雪「わい、次回から本格的に始動する【ゆつきーチャンネル】ですが、ヨーナーでは様々な質問や要望、感想をどしどしあ待ちしています! 送ってくれると作者の執筆速度も跳ね上がるかも!」

雄「…………」

雪「わい、それじゃ次回、お会いしましょ。バイーー?」

## 第三回（前書き）

こんばんは。ふゆーです。

今日もなんとか無事に更新できました。やっぱ趣味つていいですね。

さて、今回まつこに雪冬の召喚獣が登場。これぞバカテスの醍醐味です。

詳しい情報はあとがきの【ゆうきーちゃんねる】にて報告します。  
それでは、ごひらく

## 第二問

Bクラスとの試験召喚戦争。

それは普通に考えると、無謀以外の何物でもなかつた。

「び、Bクラスって……本当にオレ達で勝てるの？ オレ達のクラスって、学年最低ランクなんでしょう？」

「なに、心配はいらない。もう既に策は立ててある。お前も、俺の頭の良さは知つていいだろ？」「う？」

「それは……そうだけど……」

昔から神童として名を馳せていた雄一。常に隣にいた雪冬がその二つの名を知らないわけがない。

しかし……そのためにいくつかの過ちを犯してしまったのもまた事実。雪冬の脳裏には、悲しそうな表情をした翔子と雄一の姿が浮かんでいた。

そんな彼の思いを感じとったのか、雄一は笑いながらポンと雪冬の頭に手を乗せる。

「大丈夫だ。あの時みたいな失敗は繰り返さない。これ以上、俺の周囲の奴らを傷つけてたまるかつてんだ。俺は持てるすべてを以てして仲間を守り抜くさ」

「……うん、そうだね。ゆー君はそういう人だよ」

そう。どれだけ月日が経とうとも、どれだけ時間が過ぎようとも、

坂本雄二」という人物は他人の痛みがわかる人間だ。神童と崇められていた小学校時代でさえ、多少不器用ではありながらも翔子や雪冬のことを気にかけてくれていた。そういう部分では、誰よりも包容力のある男だとと言えよう。

(……まあ、だからオレが惚れたんだけどね)

自嘲気味に笑う雪冬。一応断つておくが、この小説にボーアイズラブ要素はない。基本的にノーマルな小説であって、決して腐女子要素は込められていないのだ！

『坂本代表！　Bクラスの先遣部隊が出動しました！』

「そうか、わかった。……さて雪冬。そろそろ覚悟と度胸を用意しろよ？」

「え？　それって、どういづ……」

「なあに、そんなに難しいことじゃない。簡単なことや」

「ヤリと妖しい笑いを浮かべる雄二」。何故だかは知らないが、突然雪冬の身体には形容しがたいほどの寒氣と悪寒が走った。これぞ主人公補正。自分の身に降りかかる災難には敏感な反応を見せる。

しかし、それに気付いたとしても確實に巻き込まれるのも主人公というもの。雄二は笑顔を浮かべたまま、雪冬にこう言い放つたのだった。

「雪冬。お前の文月学園試験召喚戦争の、デビュー戦だ」

「…………はい？」

静かになつた教室に、廊下の喧騒が一際大きく響き渡つた。

「あ、アキくん！」

「え？ って、雪冬！？ なんでこんなところに？」

Bクラス前の廊下にて姫路瑞希の指揮の下戦闘を行つてゐる明久達。戦力で劣る彼らは防戦一方だが、操作技術に長ける者たちを集めていたため、互角以上の戦いを見せていた。

そんな中に現れたド素人の雪冬に、副部隊長の明久は思わず声を荒げる。

「雪冬はまだ召喚獣使つたことないんでしょ！？ こんな混戦状態の所に来たら、一瞬で戦死しちゃうよ！」

「そ、そう言わても……ゆー君がオレに『お前ならやれるさ。俺の期待に応えてくれよ？』って……」

「畜生あの馬鹿なに考えてるんだ！ 奇跡でも起きない限り難しいだろーー？」

普通ならば小学生でもわかる。神童の雄一ならば尚更だ。それなのに、何故素人の雪冬を戦場に赴かせたのだろうか。

(とにかく、早く教室に返さないと )

撤退を、そう叫ぼうとした明久だが、

『Bクラス柴田がFクラスの転校生に勝負を申し込みます！ 試験召喚？』

「え、ええつ！？」

「くそつ！ もうこんなところにまで敵が！」

突如現れたBクラス生徒に、動搖する雪冬。予想外の事態に、明久は素直に感情を露わにする。

「雄一のバカ野郎！ 何考えてんだ？」

「え、えつと……アキくん、こいついう場合はどうすれば……」

「ああもう！ とにかく召喚して！ 話はそれからだ？」

「あ、うん！ さ、試験召喚！」

「僕も一応助太刀を！ 試験召喚？」

呼び声に応じて、一人の足元に幾何学的な模様の魔方陣が現れる。それは瞬時に光を放ち、雪冬達の足元に小さなヒトガタを形成した。そして現れる一人の召喚獣。

「……よしつ」

明久の召喚獣はいつも通りの改造学ランと木刀。どこの不良だとツツ「ミミたくなる容姿の最弱召喚獣だ。

「……今なんか誰かに馬鹿にされたような気がするんだけど……」

気のせいです。

「え、えつと……オレのは、コイツかな……？」

控えめに自分の足元を見る。そこにも明久のと同じような召喚獣がいた。

西洋の甲冑に身を包み、周囲に銀色の光を放っている。それほど輝かしい鎧だ。

しかし、その甲冑召喚獣がドでかい盾しか持っていないのは、どうこう見だらうか。戦いの術があるのか、果たして。

「え、ちょっと……武器もってないじゃん！」

「オレに言われても……でも、木刀に比べればマシだと思つけど。金属製だし」

「それを言われるといつも言い返せないけどさあ……」

はあ、と一人肩を揃えて溜息をつく。だがそんなことで敵は見逃してくれない。例の如く、三下よろしく雄叫びを上げながら突っ込んでくる。

『チヒストオ ツ?』

「くつ、よいしょおおおおおお?」

ガキン? と金属同士がぶつかり合い、甲高い音が上がる。FFクラスレベルなら一瞬で押されそうなものなのだが……、

「なつ! なんで俺の召喚獣が圧されてんだよ! ?」  
「オレが……知るわけないだろ! 」

Bクラスを相手にしているにも拘らず、雪冬の召喚獣はじりじりと相手をその巨大な盾で押し返していた。

予想外の事態に驚く明久達。そんな彼らの疑問に答えるように、二人の点数が表示される。

日本史	Bクラス	柴田亮平
168点	V S	V S
327点	Fクラス	時雨雪冬

「さ、300点オーバー！？」

あまりにも予想を上回る点数。Fクラスに入るくらいだから自分と同じくらいだと思っていた矢先に、とんでもない秘密兵器が現れたものだ。

雪冬は必死に召喚獸に指示を飛はす。

雪冬の召喚獣は盾で相手を武器ごと圧迫しながら、徐々にダメージを与えていく。今まで見たこともないような戦法。かつて防具でここまで敵を圧倒した召喚獣が果たしていただろうか。明久は、あまりにも奇抜な戦い方に、只々呆然と突つ立っていることしかできなかつた。

ପ୍ରକାଶିତ

「あ、あ、と下さくれ！ 下だけしゃ 藩じい！ 下が抑え

「あ、オッケー！」

既に相手の点数は風前の灯。明久の低い点数でも余裕で倒せるところまで減少している。明久は木刀を掲げさせると、一気に相手の脳天へと振り下ろした。

点数がゼロになり、召喚獣は光の粒子となつて虚空に消滅する。

「戦死者は補習？」

？」

「うわああああああああああああああああああああ？」

そして例の如く拉致される敵兵、柴田亮平。流石はモブキャラ。  
散り際までありきたりである。

「や、やったの……？」

「す、すごいや雪冬！ 鬼喰獣使うの初めてなのに、もう戦果をあげちゃうなんて！」

「あはは、今のはアキくんの手柄だよ……おつと」

「ゆ、雪冬ー？ 大丈夫！」

へた、と突然脚から崩れ落ちた雪冬に、明久が慌てて駆け寄る。  
気分が悪そうな表情はしていながら……ビツやら緊張の糸が切れて  
腰が抜けてしまったようだ。

「あ、あはは……力が抜けちゃった。オレ、こいつの初めて初めて  
だからね……『めんね？』

「いや、雪冬はよくやったよ。……はは」

「……ど、どうして笑うんだよー！」

「だ、だって……雪冬、なんか子供みたいなんだもん。身体も小さ  
いし。とても高校生とは思えないや」

「もう……オレはれっきとした高校生だつて。身体の大きさも土屋  
く……こーちゃんに変わらないし」

これまた子供のように頬を膨らませる雪冬。明久はそれを見てさ  
らに笑い続ける。周囲を見ると、敵戦力はあらかた殲滅された後の  
ようだ。仲間達が瑞希を中心に勝利の余韻に浸っている。

「それじゃ、僕たちも混ざりに行こうか

「ん、そうだね」

明久の手を取り立ち上がる。一人はそのまま、集団の方へと足を進めた。

「なに？ Fクラスに情報外の戦力が？」

「は、はい。どうやら転校生のようで、そのままFクラスに……しかも、獲得点数は300点オーバー。まだ日本史の点数しか明らかになつていませんが、おそらく余程の手練れかと思われます」

「そうか……よし、そのまま偵察を続けてくれ」

「はい」

高価な教材や機材が並ぶ、Bクラスの教室。その教壇に座つていた少年は、斥候からの情報を聞き、すぐさまノートを取り出した。紫じみたサラサラの髪を、なにを考えているのかよりもっとキノコヘアーにしている。一般的な考えを言わせてもうりと、百パーセントモテそうにない髪型だ。どう見ても悪役臭い。それとも、特殊なセンスを持っているのだろうか。

「ふん……Fクラスのクズ共のくせに、いきなり大した手札を切つ

カード

てきたじゃないか

作戦を記したノートに次々と赤ペンを走らせ、内容を書き換えていく。悪役のくせして、ずいぶんと頭の切れる男らしい。予想外の事態も慌てずにすぐさま新しい計画を立てていく。

「観察処分者は最初から眼中がない。ムツツリーは保健体育だけ警戒しておけばOK。島田は数学。坂本は……神童だが、今や落ちぶれたただのクズだ。心配はいらんだろう。……ということは、特に警戒すべきはこの一人か……」

### 【姫路瑞希】と【時雨雪冬】。

花丸で囲まれたその一つの名前に、少年は次々と対策を書き込んでいく。三分もたたないうちに、欄の真下は文字で埋め尽くされていた。

それを満足そうな表情で一瞥して、ノートを閉じる。彼はなぜか窓の方へと歩み寄ると、カーテンをわずかに開けながら、悪役特有の気持ちの悪い笑みを浮かべて、呟いた。

「Fクラスのクズ共め……雑魚には雑魚らしく立ち位置つて奴を、上の立場の奴が直に教え込んでやるよ」

彼の名前は根本恭一。

Bクラスの代表であり、卑怯卑劣で悪名高い、最凶最悪のクズ野郎だ。



## 第二問（後書き）

雪「ゆつきーちゃんねるうー？」

雄「おー」

雪「みなさんここにちはー。時雨雪冬です。」

雄「アシスタントの坂本雄一だ」

雪「今日はついにオレの召喚獣がお披露目されたね。西洋の甲冑なんて……カツコイイー？」

雄「武器は盾のみだけどな」

雪「いちいち上げ足取らないでよゆー君！……「ホン。さて、今日はオレの召喚獣についての情報を紹介するよー。ゆー君お願ひ！」

雄「はいはい。雪冬の召喚獣は、一般的な西洋鎧だ。類似体に姫路や木下姉の召喚獣がいるな。基本的な形はあれと変わらない。ただ、スカートの部分がズボンだったり、フリルが付いている部分はなくなっているなど、細かい点では男用にはなっているがな。

そして武器は【大盾】。文字通りドでかいシールドだ。想像できない人は、そうだなあ……巨大な周囲が少し滑らかな長方形の鉄板を思い浮かべてくれればそれでいい。

基本的な戦法は【キングダム〇ーツ】の【グ〇フイー】と変わらない。防御して防御して……隙があれば殴る！といった感じだ。……こんな感じか？

雪「はいゆー君説明ありがとう！さて、次回からはこの「一ナ一にもゲストがやってくる予定です。ベース的には本作品のキャラから出す予定ですが、リクエスト次第では他作品のキャラをお借りすることもあるかもしれません。興味がある方は是非ご一報ください！」

雄「【オレとゆー君と召喚獣】関連の質問や感想も、どしどし受け付けてくるぞ」

雪「はい、それではまた次回、後書きにてお会いしましょっ」  
雪・雄「バイニー？」

## 第四問（前書き）

こんにちばよ。ふゆいです。  
今回も無事に更新。後は週末かなあ。  
それでは、お楽しみください。

## 第四問

廊下での戦いも落ち着きを見せたため、雄一の指示を仰ぎに、明久と雪冬、秀吉は一度Fクラスの教室へと帰還していた。

しかし、戻ってきた彼らの目に入つたのは、穴だらけにされた卓袱台と、へし折られたいくつものシャープペンシル。Bクラスの手によつて、無残にも破壊しつぶされた教室の惨状だった。

「うわ、これはひどい……」

「まさかこうくるとはのつ」

「なんかもうテンプレすぎて逆に根本君が小さく見えちゃうよ……」

目の前の教室に各々呟きを漏らす三人。それほどまでに、破壊された文房具が酷いありさまだったのだ。流石は悪役根本恭一。やることも一々小物臭い。まさにクズだ。

「酷いね。これじゃ補給がままならない」

「うむ。地味じやが、点数に影響の出る嫌がらせじやな」

「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、錯塩に大きな支障はない」

「あ、ゆー君」

途方に暮れる三人に、教室の修復に勤しんでいた雄一が声をかけた。しかし、クラス代表である雄一は戦争中ずっと教室にいたはず

だ。開始前まではなにも起こっていなかつたから、これは戦争開始から今までに起こつた嫌がらせだらう。だが、それならばどうして雄一は未然に防げなかつたのだろうか。

「協定を結びたいつていう申し出があつてな。調印の為に教室を空にしていた」

「協定じやと？」

「ああ。三時までに決着がつかなかつたら戦況はそのままにして続きは明日午前九時に持越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止にする。つてな」

「それ、承諾したの？」

内容を口にする雄一に、明久が不思議そうに尋ねる。おそらく、彼は体力に訴えた方が有利になるのではないかと考えているのだろう。

「そうだ。確かにこちらとしては体力勝負に訴えた方が有利になるが、主戦力にとつてはなかなか厳しい」

「姫路と雪冬、じゃの」

「あ、そつか」

「あいつらを教室に押し込んだら今田の戦闘は中止になるだらう。

そうすると、作戦の本番は明日ということになる」

「そうだね。この調子だと本丸は落とせそうにないし」

「その時はクラス全体の戦闘力よりも一人の戦闘力の方が重要な

る」

おそらく局所的戦闘になる。雄一は明日の戦況をしつ予想していた。

話もまとまつたところで、明久達は教室の片づけを再会する。今つちに道具を揃えておかないと、これから戦争に影響が出るか

らだ。

黙々と作業を続ける。

その時、少し慌てたように教室に康太が戻ってきた。

「どうした、ムツツリーー。そんなに真剣な顔で」

「………… Cクラスの様子が怪しい」

「 Cクラスが？」

「…………（「クリ）」

そして、情報を伝えていく。

康太の話によると、どうやら Cクラスが試合戦争の用意を始めているとのこと。まさか、 Aクラスを相手に戦おうと思つてゐるわけでもあるまい。だとすると

「漁夫の利を狙つつもりか？　いやらしい連中だな」

雄一の言つとおり、この戦争の勝者を相手に戦争を仕掛けるつもりだろう。疲弊した相手なら潰しやすいために。 Cクラスもなかなかのセコイクラスである。

「雄一、どうするの？」

「そうだな。とりあえず、 Cクラス相手に協定でも結んでくるか。お互に不可侵状態になれば、心配事も減るだろ？」

そう言つと雄一達は一旦作業をやめ、 Cクラスへと向かう準備を始める。時刻は三時十分。まだ遅い時刻というワケではない。いよいよ出発となつた時、今までずっと黙り込んでいた雪冬が、突然「ゆー君！」と大声を出した。

珍しい彼の叫び声に、クラスメイト達が思わず足を止める。

「どうした？ なにか問題でも」

「Cクラスの情報は、罠かもしれない」

「なに？ どういうことだ」

「こんなタイミングでCクラスが動き始めるつていうのは、どう考

えても不自然だよ。Bクラスと協定を結んだ瞬間と同時に用意を始めるなんて。多分だけど、Bクラスとグルなんじゃないかな？」

「……なるほど。そのまま不可侵条約を結びに行けば、Bクラスが待ち受けている可能性が高い、と」

「うん。それで、【試召戦争に関するすべての行為を禁ずる】っていう協定内容を破つたからといつ理由で、攻撃を喰らうかも知れない。下手をすれば、そのまま全滅なんてこともあります」

「ふむ……言われてみるとそうだな」

雪冬の言葉に、雄一は熟考するようにトントンと自らの額を指で叩く。明久達は、思いもよらぬ雪冬の頭の良さに、ただただポカンと口を開けていた。彼の評価は【ただの大人しい転校生】から、【意外と頭のいい優等生】へと変化していることだろう。

「しかし、このままだと戦争終了後にCクラスに攻め込まれてしまい可能性が残る。それは、どうするつもりだ？」

「大丈夫。その対策も、今思いついたから」

雪冬はチラツと一人の人物に視線を向けながら、楽しそうに笑う。彼の視線の先には、ボブカットの男の娘が必死に雄一達の会議内容を理解しようとしている姿があった。

自分に向けられている視線によつやく気付いた彼は、頭に疑問符を浮かべ、自分の方を指差す。

「ん？ ワシが、どうかしたかの？」

演劇部のホープ、木下秀吉。

ついに、彼の実力を發揮するときが到来した様だ。

雪冬はこれから実行する作戦を、子供が自慢話をするように、輝いた表情でクラスメイト達に説明していった。

「恭一、本当にFクラスは私達の所に来るの？」

「ああ、なにせあのバカ共だからな。俺の作戦に気が付く訳もない。罠に嵌められたとも知らずにのこのこやつてくるさ。そうすれば、後は俺達でどどめをさしてハイ終わり。くくっ、これだからバカつてのはおもしろい」

Cクラスの教室では、Bクラス代表根本恭一が数人のBクラス生徒を引き連れて、雄一達が来るのを今か今かと待ち続けていた。

神童とまで言われた雄一が自分の罠に嵌る。と、非常に清々しいほど腐った笑みを浮かべる恭一。しかし既にその作戦は見破られていて、しかも対策まで立てられているとは夢にも思わないだろう。

「でも、Fクラス代表の坂本クンって、相当頭が切れるらしいじゃない。アンタ大丈夫なわけ？」

「おいおい、俺を誰だと思ってんだよ。卑怯なことをさせれば右に

出る者はいないとまで言われる根本恭一「サマだぜ？」神童だか何だから知らねえが、既に落ちこぼれたヤツなんかに負けるわけねえつうの」

「ふうん……ま、足元を掬われないように気をつけなさいよ？ アンタはすぐ油断するんだから」

「分かつてゐつて」

もう勝利は確定しているというような態度をとる恭一に、Cクラス代表小山友香が呆れたように嘆息する。彼がこういう態度をとるときは、決まってなにかしようもないミスをする。それも普段の彼なら絶対に冒さないような初步的なやつを、だ。彼女は表情には出さないながらも、心の底では一度くらい痛い目を見た方がいいだろうとを考えていた。恋人同士にも関わらずそんな不謹慎なことを思うとは……この一人。分かれる日も近いかかもしれない。

そんな風に、二人がFクラスが来るのを待っていた時だった。突然、Cクラスの扉がガラツと勢いよく開かれたのだ。

同時に入室してくる一人の女子生徒。

肩まで伸ばした茶色のボブカットに、前髪は銀色のピンで左へ流している。整った顔立ちはクールさを醸し出し、まさに優等生と言つた具合だろうか。

突如現れた彼女　　木下優子に驚きを隠せないCクラス&Bクラス生徒達。目を丸くしたままの状態の彼らに、女子生徒はもうことかいきなりこんなことを言い放つた。

「静かにしなさい！　この薄汚い豚ども？」

『『『…』』』

突然の罵声。まさかAクラスの優等生がそんな汚い言葉を使うとは。密かに彼女に好意を抱いた生徒もいただろつに……。

「な、なによアンタ！」

急に現れて自分たちを豚呼ばわりした優子に、友香は若干戸惑いながらも怒鳴りかかる。しかし優子は一切動搖を見せずに、偉そうに前髪を手で払うと言葉を続けた。

「話しかけないで！ 豚臭いわ！」

自分から話しかけたにも関わらず罵声を言い続ける優子。もう矛盾とか理不尽とかを一気に通り越して溜息しか出でこない。なんて女だろうか木下優子。どうすれば初対面の人間にここまで人道から外れた態度をとれるのか、甚だ疑問である。

「アンタ、Aクラスの木下ね？ ちょっと点数が良いからっていい気になってるんじゃないわよ！ なんの用よ！」

「つるさいわね。静かにしなさいと言ったのが聞こえなかつたのかしら？」

キーキーとヒステリーボイスで叫ぶ友香を優子は軽くいなす。  
教室の隅に隠れて彼女達の掛け合いを見ていた恭一は、どこか違和感に気が付いていた。

(おかしい……なんでこんなタイミングでAクラスが動くんだ？  
しかもよりによつてCクラス。もつと下のバカ共は旧校舎にまだ三  
クラスもいるつてのに……)

「私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！ 貴女達なんて豚小屋で充分だわ！」

「なつ！ 言うにことかいて私達にはFクラスがお似合いですって！？」

別にFクラスとは一言も言つてはいないのだが、彼女の中では豚小屋＝Fクラスの教室という方程式が成り立っているらしい。憐れFクラス生徒達。君達は今この瞬間、今まで豚と同等の扱いをされていたことが判明した。

「手が穢れてしまうから本当は嫌なのだけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送つてあげよつかと思つた。ちょうど試合戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴女達を始末してあげるから？」

優子はそう言い残すと、靴音を立てながら教室を後にした。  
後に残されたCクラス生徒達は、ふつふつと沸いてくる怒りの感情を確かに感じていた。

「あ、あの猫かぶり女めえ……！　みんな！　私の言いたいことは分かるわね！？」

『もちろん！』

『あの舐めきつたAクラスに田に物見せてやりましょー！』

『俺達だってやればできるんだ！』

「お、おい！　冷静になれお前達！　これは絶対にかの罠だつて」

「

「うわよ恭二！　アンタは部外者なんだから黙つてて？」

なにかに勘付いた恭二が必死に止めようとするが、既にボルテージが最高潮の彼らは一向に止まる様子を見せない。

(くそっ……坂本のヤツ、やりやがったな……！)

田の前で徐々にテンションを上げていくCクラス生徒達を見ながら、恭二は悔しそうに拳を握りしめていた。

「あつはつは。いやー、流石は秀吉。凄い手際だつたな」  
「うん。さすが演劇部の期待の星だね。まさかあそこまで完璧に演じるなんて。……まあ、僕のなかで木下さんの評価がひとつと変わつたけどね……」

「…………大手柄」

「い、いや、そこまで手放しに誉められると照れるの……そもそもこれは全部雪冬のおかげじゃろつて」

「うん。オレはひで君の長所を生かしただけだよ。Cクラスをやる気】させたのは間違いなくひで君の手腕だつて。誇つていよいよ」

「そつかのう……？　まあ、そこまで言つならありがたく受け取つておぐべ」

「さあて、これでとうとう邪魔者はいなくなつたな」

「明日からは気が楽になるね」

「うん。これで、Bクラスを心置きなく倒せるよ」

「ああ。根本のクズヤロー。俺達を怒らせたらどうなるか、その身体に教え込んでやるよ」



#### 第四問（後書き）

雪冬「おひつやーおひやんねるやー？」

雄一「おー」

雪「おはやつやー！ 司令の時~~函~~雪冬です！」

雄「アシスタントの坂本雄一だ」

雪「早いもので！」のむつやーちゃんねるもむつ!!回田..」

雄「そもそも作者の思付きで始まつたよつなもんだからな」

雪「これもひとえに読者の皆様のおかげ。とこ<sup>う</sup>わけで今回はゲストをお呼びしました」

雄「みなさん」存知最強のバカ。吉井明久だ

明久「ちゅ、ちゅっと雄一！ バカ扱いは酷くないー！？」

雄「何を言つ明久。『!!』扱<sup>こ</sup>されないだけマシと思え」

明「これ以下の扱いがあるのか！」

雪「さてゲストのアキくんですが、アキくんはこの作品をどうの思  
いますか？」

明「うーん、なんとか、原作と違つといふはあまりないけど、雪冬がなんか雄二とB」になりそうな感じがするね」

雄「そうか。お前はそんなにハバネロが好きなんだな。それなら畠田にこれでもかとこいつへりい塗りたくつてやるわ」

明「ギヤ アツ？ 目がつ！ 目があつ？」

雪「もつ駄田じやないかゆー君。……こいつときは鼻にわさびも詰めないと」

明「鼻から激しい辛みが！ 涙が止まらない！」

雄「……つと、明久を虐めている間に時間が来てしまったようだな。まつたく。どこにいようが迷惑なやつめ」

明「え？ 僕のせいなの？」

雪「それでは次回、後書きでお会いしましょう。次回もゲストは来る予定です」

雄「感想・質問・ゲストの使用許可、待ってるからな」

明「ねえ待つて。ホントに涙が止まらないんだけど」

雪「それではまた皆さんに会えることを願つて」

二人『よーなうー？』

明「僕はア

「？」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6549y/>

---

オレとゆー君と召喚獣

2011年11月24日22時47分発行